

山岳スキー競技の変遷とこれから

澤 田 実 ((公社)日本山岳・スポーツライミング協会 山岳スキー委員会委員長)

【山岳スキー競技とは】

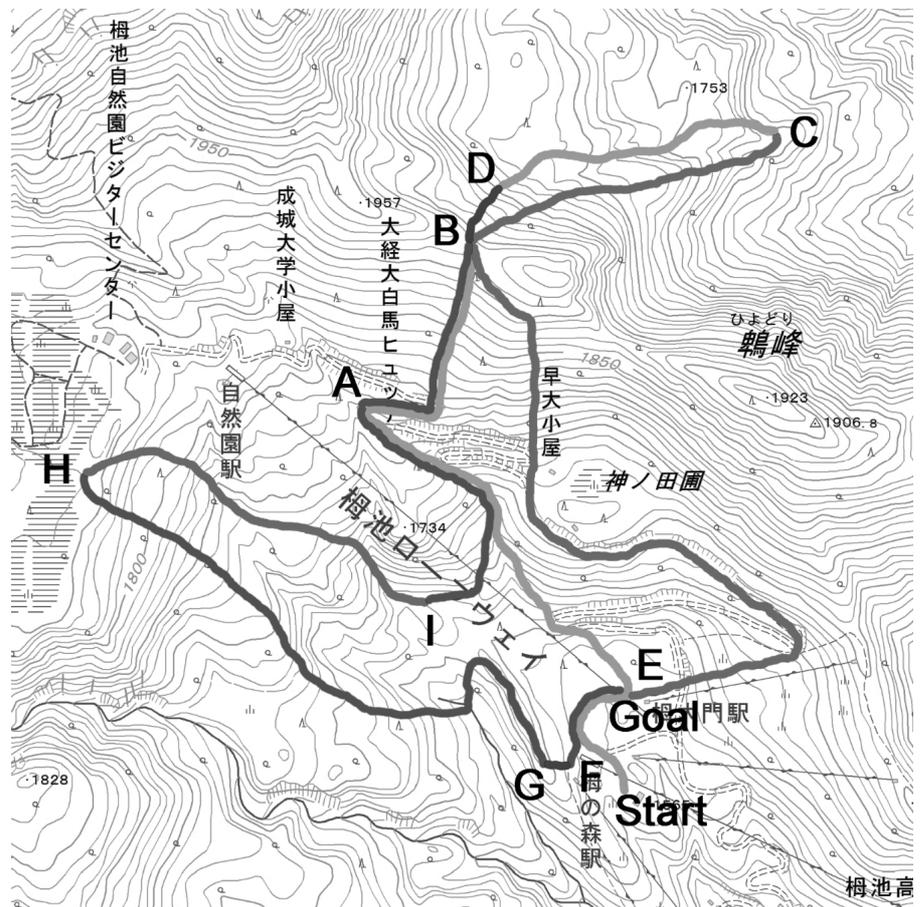
山岳スキーというと、雪山に入ってスキー滑降を楽しむ遊びを思い浮かべる人が多いのではなかろうか。いわゆる山スキーとかバックカントリースキーと言われるもので、山の楽しみ方の一形態として、愛好家も多い。

しかしここでいう山岳スキー競技 (Ski Mountaineering) とは、登山の一形態ではなく、あくまでスポーツとしてルールを持ったスキー競技の一つを指す。具体的に言うと、山岳エリアに設定された登り下りを含むコースを、スキーで周回して戻ってくる時間を競うタイムレースだ。登りではスキーにシールを付けて登高し、下りはシールを外してかかとを固定して滑降する。またコース中の一部の急斜面や岩場では、スキーを外してザックに取り付け、ブーツ歩行で通過するよう設定された区間もある。つまり雪山ツーリングを細かくコース設定し、タイムレースにしたものと言える。

具体例として、第12回の日本選手権大会の予定コースを図1に示す。コースの総標高差約1,400m、沿面距離約14km。早い選手はこれを2時間程度で周回してくる。

【歴史】

この競技の歴史について触れたい。もともとはヨーロッパの山岳軍のトレーニングの一環として行われていたレースが起源らしい。古いものではイタリアのMezzalama Trophy (メツァラマ・トロフィー) が1933年から行われており、やがて一般の参加者も



凡例 —— シール登高 —— スキー滑走 —— ブーツ歩行

国際規格男子コース	スタート⇒A⇒B⇒滑走⇒C⇒D⇒ブーツ⇒B⇒滑走⇒E⇒F⇒ブーツ⇒G⇒H⇒滑走⇒I⇒A⇒B⇒滑走⇒C⇒D⇒ブーツ⇒B⇒滑走⇒ゴール
-----------	---

図1 2018年 第12回日本選手権大会 予定コース

迎え入れて、スキー競技として定着するようになる。この大会にスイスのPatrouille des Glaciers（パトリール・ド・グラシエ、1943年～）とフランスのPierra Menta（ピエラ・メンタ、1986年～）を加えて、三大レースと呼ばれている。これらの大会は山岳軍の競技であった影響もあり、距離は50km程度、標高差も大きく、また2人か3人でのチームレースの形態をとっている。

やがてヨーロッパで、これらの山岳スキー競技を取りまとめる団体CISAC（国際山岳スキー競技委員会、Comité International du Ski-Alpinisme de Compétition）が1991年にでき、それが1999年にUIAA（国際山岳連盟）配下のISMC（国際山岳スキー競技評議会、International Council for Ski Mountaineering Competitions）に合流する。この流れの中でこれらの団体は、競技のルールを整え、シリーズ戦も開催し、スポーツ性を高めていった。具体的には、長距離レースばかりであったものをサイズダウンして管理運営のしやすい大会を開催し、また登りだけの種目やリレーなどの種目も作った。またチームレースに加えて個人レース種目（Indivisual）も設定された。

時は2000年代に入り、他の競技団体の例にもれずISMCはこの競技のオリンピック種目化を目指すようになる。2004年には世界的な普及を目指して、これまで参加してこなかった多くの国々をスペインでの世界選手権に招待して参加させた。実はこの時に日本からも4人の選手が参加し、それがわが国でのこの競技の始まりとなる。やがて参加国も選手も増えてきたISMCは2008年UIAAから離れ、ISMF（国際山岳スキー競技連盟、International Ski Mountaineering Federation）として独立した競技団体となった。

現在はISMFのもと、世界選手権や各大陸別選手権、ワールドカップ戦などが開催されている。競技種目

も、山中に設定されたコースを周回するレース（2人一組のチーム戦と個人戦がある）以外に、シールを付けて登ることだけを競うヴァーティカル、ゲレンデなどに設定した短いコースを周回するスプリント、国別のリレーなどが行われている。ISMFに加盟する国と地域は33に上っている。

【国内では】

2004年の世界選手権には、日本山岳協会（当時）で海外登山委員（当時）をしていた私も参加させていただいた。この競技を知った時の衝撃は激しく、「スキーを履いて走れるんだ」という事実は、私のスキー登山観を一変させるものであった。その知見によって帰国の一週間後には、スキーによる黒部横断ワンデイの登山を実践した。

そして世界選手権を見てきた日山協の委員である笹生博夫氏と私は、この競技をぜひ日本人たちにも知ってもらいたいという強い思いから、第1回山岳スキー競技日本選手権大会（日山協主催）の開催にこぎつける。この大会は2005年4月17日、長野県梅池高原スキー場の上部エリアを使い、42名の選手の参加を得て開催された。見たことのない競技に参加する選手たちは、思いおmoiの装備を持ちこみ、革靴やら取り付けシール、アザラシ皮のシールまであり、さながら山スキーの博物館のようだった。この大会にはISMCからの派遣により、2004年世界選手権個人戦優勝者であるRico Elmer選手（スイス）が来日、参加してくれた。彼の桁違いのスピードは、日本人の度肝を抜くものであった。

現在、途中で二回の中断もあったが、梅池高原を会場に日本選手権大会は継続して開催されている。今シーズンは2018年4月15日に第12回大会を開催する予定である。

3. 登山界の現状と課題

【近年の状況】

2017年7月、国際オリンピック委員会（IOC）の理事会において、山岳スキー競技が2020年スイスのローザンヌで行われる第3回冬季ユースオリンピックの追加種目になることが決まった。それを受けて日本山岳・スポーツクライミング協会では、これまで国際委員会や競技委員会（現スポーツクライミング部）の下部組織として動いてきた山岳スキーを、山岳スキー委員会として独立させた。これからの動きに対応させるためである。そしてISMFは2022年の北京冬季五輪において、正式種目化を目指している。

国内では、2005年から始まった日本選手権大会の参加者が50人を超えることは、長らくなかった。しかし地道な継続の結果、少しずつ競技も知られるようになり、2014年に55人の参加者を得ると、そこからは少しずつ選手も増えてきた。近年はトレイルランニングがブームであるが、その愛好者が冬季の山岳耐久レースととらえて参戦してくる傾向が強まっている。実際には世界でも、季節に合わせてトレランと山岳スキー競技の両方に参戦しているトップランナーは多く、日本でもその流れが出てきている。

以前は梅池の日本選手権のみが唯一の大会であったが、今は愛好家が主催するいくつかの草レースが各地で開催されている。以下に2018シーズンのレース予定を列挙する。

- 12/29（金）ばんけいナイターレース
パドルクラブcup（北海道札幌市）
- 1/27（土）梅池ナイターズプリントレース
BUFF cup（長野県小谷村）
- 2/17（土）パラダナイターレース
（長野県佐久市）
- 2/24（土）ばんけいナイターレース 秀岳荘 cup
- 3/17（土）梅池ナイターズプリントレース
Dynafit cup

3/17,18（土、日）宮城オニコウベ山岳スキーレース
（宮城県大崎市）

3/31（土）ばんけい山岳スキーレース

b.c.map cup

4/8（日）白馬八方バーティカル

（長野県白馬村）

4/14,15（土、日）日本選手権大会 梅池高原

（長野県小谷村）

4/22（日）尾瀬岩鞍SKIMOレース

（群馬県片品村）

【これからの山岳スキー競技】

国際的には前述したとおり、五輪種目化を目指し、のちには冬季スポーツとしての確立と世界への浸透が図られていくものと思われる。

国内的にはまだまだ競技者も少なく社会的認知度も低いため、その向上が急務となっている。そのためにはメディアも利用して、この競技の魅力をより多くの人に伝えていかなければならない。そして参加しやすく楽しい大会を開催すること、競技向けの用品の普及、これからの担う若い選手層の発掘など、やるべき課題は多い。

この競技は他のスキー競技と違い、ゲレンデではなく山の中で行われるスポーツである。そのためレース管理や安全確保のために多くの人員が必要であり、実際に天候や積雪状況など難しい判断を強いられることも多々ある。スポーツとして健全に発展させるためには安全確保は絶対条件であり、運営には十分な配慮がなされなければならない。日本山岳・スポーツクライミング協会としても、組織として万全の体制で運営に取り組む必要があるだろう。

日本は世界でも稀にみるスキー天国であることは周知の事実だ。いまや世界中のスキーヤーが日本のパウダーを求めて滑りに来る。山も雪も、世界に誇

れるものを我々は持っている。ゆえにヨーロッパで
発祥したこのスポーツを世界に広げるにあたり、ISMF
が日本にかける期待も大きなものがある。いずれは
日本の地でワールドカップや世界選手権を開催し、
世界のトップ選手の驚くべき走りや滑りを、多くの
日本人たちに観てもらえたらと、夢を広げている。

